

新入學の尋常一年生

——幼稚園より小學校へ——

東京女子高等師範
學校附屬小學校

北澤種一

小學校といふものは何ういふものか、特に尋常

一年生の生活は何ういふものであるか、この問題

は幼稚園の保姆の研究して置かなくてはならない
ものであります。學齡に達した幼児を持つ家庭に
於ても、等しく此の問題の重要なものであること
は言ふまでもありません。

兒童が尋常一年生として、始めて小學校に入學
して來た時、學校では特に之を何ういふ風に取扱
ふか、この事に就て次に少しくお話ししてみたい
と思ふのであります。

新入學の一年生を何う取扱ふかといふこの問題
を説くには二つの方面から説くのが便利であるや
うに思ひます、それは學校としての方面からと學

級としての方面からとであります。

先づ學校としての方面からこの問題を説きます

と、學校は兒童を學校生活に順應させることを必
要とします。學校生活といふものは兒童がこれま
で經驗して來たところの家庭生活若しくは幼稚園
生活にくらべると比較的に規律が立つて居ります
即ち多少規則的になつて居るのであります。この
規則的生活といふことは五百人なり六百人なりの
兒童を集めて教育するといふことの爲めに當然起
つて來たことであります。一方又兒童をして團
體生活に馴れしめ、延いては社會生活の準備教育
を受けしむるといふ教育的目的からも來て居る
のであります。この二重の理由からして小學校は

その托されたところの兒童に對して規則的生活を要求するのであります。すなはち新入學の一年生と雖も、二年生以上の兒童と同じやうに學び、遊ぶ時には遊ばなければならぬのであります。一年生ばかりが課業に飽きて了つたからと言つても規定の時間が來なければ無暗に室外へ出て嬉戲することは許されないと共に、遊びに集中して居ても課業の時間が來れば直ちにこの遊びを中止して教室に入つて學ばなければならぬのであります。

この一定した時間の規律を守らぬとそれが爲めに學校全體の生活が害を受けるといふことになりまゝす。それ故に學校では新入學の一年生に對しては成るべく早く規則的生活に馴れしめやうと努めるのであります。

一人の兒童が悪習を持つてゐて、運動遊戯等の際に之を現すやうになつたことがありますと、これも學校全體に影響を及ぼしますから取締らなければなりません。家庭や幼稚園では氣附かれたな

かつた習慣も學校へ入ると、そこには既に一定の規律があるためにこれが目立つて、他の生徒達にも奇異の感じを懐かせることがあります。それ故に學校は早くその生徒の持つてゐる特殊の習慣を無くすことに努めるのであります。これまでは時間の方に於ても比較的自由なる生活を家庭なり幼稚園なりで送つて來た幼兒は小學校へ來るとさう自由にはかりはしてゐられなくなるのであります。

それから又學校生活の中には教師といふものが入つて來ます、從來は父母兄弟若くは保母の手にのみ委ねられてゐた兒童は新たに教師といふものと接觸するやうになります、而してこの教師といふものは父母兄弟とも違へば保母とも違ふものであります。從來のやうに面倒を見てくれる人々といふよりも教へ導いてくれる人が教師であります。教師の言ふことには服従しなければならぬといふことが兒童によく理解され又實行されなければ學校生活といふものは行はれません。このとは學校

生活が行はれないから是非守らねばならぬといふことの他に服従といふ徳目を養ふ上からも必要なことであります。

それから又生徒同志は互ひに親愛しなければなりません。この親愛といふことがなくつては學校生活と稱する一種の社會生活は圓滑に運轉しなくなるのであります、この生徒同志互ひに親愛するといふことは家庭に於て比較的我儘に育つた子供には容易に出來ないことであります。この點に於ては幼稚園を経て來た子供の方が餘程具合よく行くやうであります。同級の子供達と親しまなくて困るといふやうなことは幼稚園から來た子供には滅多にありません。

幼稚園ではこの生徒同志の互ひの親愛といふことを小學校程には問題としてゐないと思ひます。幼稚園では強いて幼児同志を親しませるといふことが眼目ではないかも知れません。むしろ幼兒のめい／＼をして、その個性を發揮せしめ、本能の赴

くまゝに活動せしめることを以てその特色として居るのでありませう。が併し小學校ではこの幼稚園の遣り方をそのまゝ踏襲するわけにはゆきません、小學校は矢張生徒同志の互ひの親愛といふことに力を盡し、將來の社會生活のために準備を作らなければならぬのであります、而してこれには無論一年生の時からこの習慣をつけるやうにしなければなりません。

その他、一般に學校生活を快活な空氣を以て充たして置くといふことは教育上大切なことでありまして、新入生にもこの空氣に馴れしむることの必要であることは言ふまでもありません。作業するにも遊ぶにも、最も快活なる精神を以て之を爲すやうにしむけるのが小學校教師の爲すべき務めの一つであります。

次ぎには少しく學級といふ方面から新入學の一年生を如何に取扱ふかといふことを述べてみます。

學級とは同一年齡者を一かたまりの團體に集めて一人の教師が教へるのでありまして、所謂團體教授のことでもあります。

團體教授は個人を對象とするところの個別教授とは異つて居りますので、團體を形づくる個々の兒童が團體的學習が出来るやうな態度を持たねばなりません。といふのは一人の先生が一言いへばそれが全體の兒童に通じるやうに、又一度何か見せればそれが全體の兒童に漏れなく見えるといふやうにしなければならぬといふことであります。

そこで若し見えなかつたり、聞えなかつたりした場合には自から進んでも聞き直し、見直さうとする態度がなければなりません。家庭や幼稚園では比較的個人的の生活であつて、一人の人が一人の子を相手に話をするといふことの方が主に行はれてゐました、而してそれが又適當な方法であつたのであります。しかし小學校では之を行つて居るわけにゆきません。故に入學の最初からさうい

ふ練習をさせ、先生の一舉手一投足がすべての兒童に漏れなく徹底することを期して居ります。かかる態度は却々一朝一夕には養成されません。けれども家庭や幼稚園で話を聞く練習をよくやつて居れば學校に來ても早くから團體的學習の態度をとり得るのであります。

家庭の躑けのよい子供、幼稚園で保育を十分に受けて來た子供は小學校ではあまり骨を折らずに團體的學習に適應させることが出来ます。

今日の幼稚園といふものは幼兒の發表の能力を非常に尊重して居ますが、これは誠に結構なことであります。しかし團體生活に於ける一人として自己を如何に發表するかといふことに對しては幼兒といへども相當の考慮を費さなければならぬのであります。小學校では各兒童が一定の規律の下に十分にその發表の能力を發揮することを望むのであります。他の兒童の迷惑や教授の妨害になることをかまはずに、兒童の發表能力の自由を

許すわけにはゆかないのであります。

幼稚園を経て来た兒童は兎角この點に於て批難を受けるやうであります。幼稚園から来た子供には往々不規律に自己を發表する習慣が附いて居りまして、學校生活に早く順應することが出来ないものがあります。

要するに兒童を學級教授に適應させるといふことは教師の活動に對して兒童が目や耳を適當に順應させてゆくといふことであつて、これは兒童をして自發的に爾^{しか}せしむることが教育的であるのであります。一年生といふやうな場合には矢張外部から制せられ、習慣づけられることによつて自己を學級教授に順應せしむる方が多いのであります。

次ぎには學級教授の内容は如何といふ問題が起つて來るのであります。これは矢張既に細目によつて定つて居る所の教材を各の兒童に徹底せしめるとであります。教材の中には深く研究すれば

兒童の程度に合はぬものもあるかも知れません。

しかし大體これまでの經驗によつて兒童に適當と思はれるものを並べて、これを順々に兒童に徹底させやうと努めるのであります。例へば或る兒童が嫌ふ教材であつても強いて學習させなければいけないといふやうな場合も起つて來るのは止むを得ないこととあります。小學校といふところは單に兒童の機嫌取りに終始して能事終れりと爲すところではありませんから。

従つて兒童の方から言へば苦痛を忍んで順應しやうと努力する場合の起ることは言ふまでもありません。これは家庭や幼稚園に於ける自由な生活にはあまり見られないこととあります。

尙教授の時間といふやうなものも、學校全體の爲めから言つて何うも一年生ばかりに都合のいゝやうに時間を區劃することは六ヶ敷いこととあります。一年生には少し時間が長過ぎると思ふやうな場合があつても學校管理の上から他の級の兒童

が教室に居る間は教室に居させなければなりません、而して漸々この規定の時間中は教室に居なければならぬといふことに馴れさせるのであります。言ふまでもなく小學校としては、この一單元の時間中注意を緊張させ、精神を旺んに活動させてゐる兒童が最もよい兒童といふことになるのであります。その時々^々の氣分とか感情とか言ふやうなものによつてのみ自分の行動を支配させてゆくといふやうなことは小學校に於ては許されないのであります。若しさういふ兒童があるとすればそれは學級教授には適さない兒童といふより外はありませぬ。

以上に述べたやうなことはすべての兒童に對して各々を皆凡ば等しい個性を持つものと認めた考へ方ではありますが、實際に於ては一年生は各自個性の差異を持つて居ります。この差異の中には尊重すべきものもあるであらうし、又あまり顧慮を要しないものもありませう。乍併これを學級に順

應させるためには他の學年に於てするよりも新入學の一年に於てする方が一番効果的であるのであります、而して小學校ではこの目的を遂げるために他の學年に對して拂ふ注意の上に更に一層の注意を加へて一年生を取扱ひ、適切なる教育方法を講じやうと努めるのであります。

幼稚園を経て小學校に入學した兒童の中にも鼻汁を垂してゐる子があつたり、目糞が溜つてゐる子があつたり、口をぼかんと開いてゐる子があつたりしますが、これでは何うも困ると思ひます、一體幼稚園で何をしてゐたか、家庭から直接に來た子と較べて何れだけ優れてゐるか、私達は疑無きを得ないのであります。「鼻汁をおかみなさい」「お口を塞いでいらつしやい」から小學校で教へて行かなければならないのなら幼稚園は小學校の前に幼兒を預つてゐて如何の程度にまで幼兒の教育を爲したと敢へて言ふのでせうか、幼稚園を経ずに直接家庭から入學した兒童でも、家庭の躰けの

よかつた兒童は鼻汁を垂してはゐません、目くそを溜めてはゐません。お口を開いてはゐません。

それから又小學校では兒童に姿勢をよくすることを要求します、特に一年級では腰を掛ける時の姿勢をつくるといふ事が大切な仕事のひとつとなつて居ります。これなども家庭の躰けのよい子供は小學校へ来ていきなり椅子に腰をかけてもちやんと正しく腰を掛けます。

最後に小學校から幼稚園に對する希望を少しく述べてこの話を終らうと思ひます。

世界各國何處の小學校に於ても、兒童が小學校へ入學した當初の數ヶ月間に於ては身體と精神との兩方面に故障を生ずるといふことが認められて居ります、即ち兒童は疲勞を感じたり、神經が過敏になつたりするのであります。このことは何に原因するかといふと、あらゆる學者の説は、生活形式の激變といふことが原因であるといふことに一致して居るのであります。

この點から考へますと幼稚園は幼兒が家庭から小學校へ行く途中の中次ぎとして十分に存在の理由を保つものであるといふことは認められるのであります。即ち幼稚園は家庭と比較する時には幾分學校的であると共に、小學校と比較する時には幾分家庭的であるべきものではなからうかと思ひます。故に幼稚園を経て小學校に入學する兒童は家庭から直接に小學校に入學する兒童に較べて、早く小學校といふものに順應するといふ特色を持つてゐて然るべきであると思ひます。

然るに幼稚園が家庭と同じで全然社會的の訓練が届いてゐないで、幼稚園を経た兒童も家庭から直接に小學校に入學した兒童と同じやうに疲勞を感じ、神經過敏になるやうでは折角幼稚園といふものへ通つた甲斐がないと思ひます。それ故に幼稚園では上の級の幼兒には團體生活の色彩を帯びさせ、それに必要な訓練を無論幼兒の程度に應じて施すことが肝要であると思ひます。(文責在記者)